

「他者」を聞きとるということ 崎山多美における音の考察を通して

佐喜真彩

一 はじめに

呼びかけは、すでに届いている。問われているのは、この到来する呼びかけを、言葉となる手前の声を、ささやきを、沈黙を、どう聞きうるのかということである。求められているのは、沖繩を聞くという営みを介して、私たちが共に生き延びていくための模索を重ねていくことである¹⁾。

沖繩、が本来計り知れない程多くの人々の関係性を示し得る語だとすると、「沖繩を聞く」というフレーズに、どれだけ重層的な意味が含まれているのか想像しきることはないだろう。しかし、「沖繩」と言葉に発した途端、その無数の響きは単一

に収斂してしまうのが現状である。その響きを聞き取ることは果たして可能なのだろうか。

新城郁夫は『沖繩を聞く』のあとがきにおいて、屋嘉比収の「他者の声」を聴き取る実践を継承する意志を示しつつも、その際に「他者」という言葉の再定義を行う。映像作品『鳥クトゥバで語る戦世』(二〇〇三年)は、沖繩戦の体験を歴史の一部に記録編集する作業が、標準日本語で行われることで、逆説的に何かを消失させているという危機意識を抱いた「琉球弧を記録する会」によって制作された。その映像では、戦争体験者である語り手と聞き手の両方は、学校教育によって強制され習得した標準日本語を使う代わりに、自然に身になじんだ島クトゥバで話す。屋嘉比収は、その作品について、従来の日本語に

よる証言では引き出すことのできないリアリティを表わすことに成功していると評価するのだが、同時にまた、「同じ言葉が共有されているがゆえに、他者の視線や語りを遮断して排除する『仲間内の語り』に陥る危険性」があることを指摘する²⁾。

屋嘉比が「仲間内の語り」と表現するのは、具体的には、当時兵士であった男性証言者が「その自給末遂の同僚兵士の首を斬る話や、負傷し破傷風にかかってもがき苦しむ兵士を銃殺した」ことを「薄ら笑いの表情を浮かべ、話の途中で鼻のなかをほじりながら語る」場面であり、彼はそのような「同郷で同世代であるという気安い仲間内の語り」——端的に言ってホモン—シャルな語り——から締め出される他者の存在に目を向けているのである³⁾。屋嘉比の実践は、こうした「仲間内の語り」の問題に注視し、そこから排除される「他者の声」を聴き取る作業なのである。新城は、屋嘉比のその姿勢の必要性を認めつつも、聴き取る主体とその他者の関係を問う。つまり、たとえ他者を聴き取ろうとする試みであっても、その行為が、聴き取る主体の自己構築の言説を補強することになるのであれば、他者を聴く試みもまた「仲間内の語り」から抜け出ることがないことを示唆し、「他者」そのものを再定義するのである。新城は、「他者の声」を聴く実践の重要な点は、安定した地に身を置いた主体が（自己構築を助けるように）他者を聴くというこ

とはではなく、その自己確定的な主体では捉えることのできない声を聞き取ろうとする行為によって、聞き取る主体がこれまで予期していなかった「他者」に開かれていくということなのではないかと論点を整理し直すのである。

「沖繩を聞く」という句の「聞く」が屋嘉比の使う「聴く」から変換されていることは、新城のその思考の表れであるだろう⁴⁾。「聞」という文字は、『漢字源』の一番目の定義によると、「へだたりをとおして耳にする」「人の話やよそからの音を聞く」という意味であり、聞き取る自己と聞き取られる他者との間には常に隔たりがあるということ、また、他者から発せられる声は聞き取る自己にとってよそから来るものであるということを含意している⁵⁾。鶴飼哲は、その論考「欲待の思考」において、「そちら」や「あちら」が「こちら」に対して関係付けられている指示代名詞となっているのに対して、『よそ』という言葉が暗示する範囲の無限定性を指摘する。「よそ」は、「そちら」や「あちら」と同様に「こちら」との関係で位置づけられていることもあれば、必ずしもそうとは限らず、『よそ者』とはどこから来たかわからない者のこと」を意味するよう⁶⁾に、「安定した対称項がない」⁶⁾。新城の文脈で言い直せば、「よそ」は、自己確定的な主体の対象項となる他者には限定されず、そのような主体には予測できずどこからやって来るのか

わからない「他者」の存在の意にもなり得る。「欲待の思考」は、他者を確固とした自己の対称項に置くことでそこに自己を投影する思考様式を問いただし、これまで気づかれずに潜在した「他者」へ開こうとする。自己の自己性を保障するように留め置かれる他者を聴くのではなく、自己がすでに他者に対して主であるという認識自体を揺るがす「他者」を聞き取る——「欲待」する——という思考が、新城の「聞く」という文字の採用に表れているのである。

沖繩の現代作家である崎山多美は、音を「他者からの奇怪な呼びかけ」として捉え、それを小説に書きこむことを試みるのだが、この時の彼女の関心もまた新城の提起する「沖繩を聞く」と重なっている。本論文は、崎山の小説「ゆらていくゆらていく」における物語構造と言語的実験を分析することで、「他者」を聞き取るということに加え、それによる主体および共同体の変容の意味を提示したい。

二 翻訳から「翻訳」へ

酒井直樹は『日本思想という問題——翻訳と主体』において、「日本人」のような均質的な国民主体が自明なものとして措定されることに問いを発し、均質言語とそれを欲望する主体の出

現には、翻訳という行為が分ち難く結ばれていると分析する。

翻訳とは、一般に、二つの異言語間の伝達を可能にさせる媒介であると捉えられるように、一つの言語から他の言語へ等価的意味を届ける行為と言えるだろう。しかし、翻訳をこのように等価的意味の伝達と定義することは、言語それ自体が数量化できるということを無批判に前提している。酒井は伝達としての翻訳のその性質に注目し、「翻訳の行為が言語を分節化し、翻訳の表象を通じて、あたかも翻訳する言語と翻訳される言語の自立的で閉じられた統一体が存在するかのように、それらの言語を措定することができるような制度が成立することになる」という「翻訳の実践系」を説明した⁵⁵。酒井が「言語を分節化」(articulation)するという時には、もともと同一尺度における多様な言語を、計量可能なものとして同じ天秤に乗せることを指す。したがって、先の引用が意味するのは、等価的意味の伝達を目的とする翻訳が行うことは、計量不可能な異言語を了解可能な地平へ結びつける役割を果たす差異化であるということなのである。その差異化を可能にするためには、同一尺度上に二つの言語を置かなければならないのだが、その際両方の言語は異種混淆であってはならず、それぞれ比較可能な程度に均質的である必要がある。それゆえ、均質な言語、そしてその言語を話す均質的主体が構成する共同体が想像されなければ

ならないのである。翻訳を行う主体は、翻訳する言語の「同一」言語圏と翻訳される言語のその両方において、このような均質空間が確保されているという前提があつてのみ、両言語間の等価的意味の伝達を可能にさせるのである。つまり、「翻訳の実践系」は異言語を比較し、さらにそれを可能にさせるよう各々の言語および共同体の内部の均質化に向けた抗争を要請するのである。酒井は、このように一般に考えられる等価的意味の伝達としての翻訳という行為を精査することで、他との比較において自己の言語およびそれに伴う共同体を理想的に構築していく図式（「対—形象化の図式」）を説明したのだが、このように翻訳は異なる自他を結びつけることを可能にさせるといふよりは、異種混淆の計量化不可能な差異を計量可能な差異へと作り替え、それらの間の伝達を行うと定義する方が正しい。こうして翻訳は、「純粹」な国民言語および国民主体を形成するように機能するのである。

酒井が国民言語および国民主体の生成をこのように説明することの意義は、均質性を志向するばかりにそれにとって異質なものが消失する事態を指摘することだけではない。さらに重要なのは、「同一」言語や共同体から「異質」として排除されたものが、抵抗として自己の存在を提示する際に、それらに真っ向から対抗するように与えられたその「異質性」をそのまま打

ち出す限りでは、皮肉にも、「対—形象化の図式」を促し、自己の多様性を自ら均質化させる語りとなってしまうという問題の指摘である。沖繩の文脈においても、唯一の国民語である「日本語」が、教育の場で沖繩の言葉や「方言」として排除してきた背景があるのだが、新城もまた酒井の主張のように、それに抗うために「日本語」と「琉球方言」の差異を提示して、後者の独自性や特異性を打ち出しながら、それを回顧的に復権させる主張の在り方に疑義を呈する。「学術的な比較・測定技術そのものが、「日本語」や「琉球方言」といった即自的な領域を生み出している」⁹⁾という彼の指摘にもあるように、その比較の思考およびそれによる自他の均質化作用を問うことなしに「沖繩語」を提示することは、均質化の力学を自ら内面化し再生産することになるのである。均質的な「日本語」が形成される過程で、それを補強するよう「沖繩語」なるものが生みだされた力学そのものへの批判がなされなければならない。

「日本語」に対する「沖繩語」という選択は、こうした意味で相互依存的で同義語反復的であり、それゆえ「百数十年前から現在にまで続く国民化と言語をめぐる権力行使の痕跡そのもの」を隠蔽してしまう¹⁰⁾。求められることは、新城の言うように、「国民化と言語の問題を、既に見知った光景のなかにおいてではなく、その根底を規定する日本語や日本人を前提としな

い磁場において思考する」ことであり、その態度において、純粋な国民主義志向によって生じた所与の「異質性」とは異なり、計量不可能で比較不可能な異質性の提示の用途が見出されるのである¹⁰⁾。

酒井は、こうした等価的意味の伝達という機能とは別の「翻訳」の側面を引き出すために、翻訳者の主体を問う。伝達としての翻訳における翻訳者は、言語やそれを使う共同体を具体的に経験する人格ではなく、翻訳される言語および翻訳する言語の両方を均質的な言語空間と前提する社会的イデオロギーの再生産を行う主体である。しかし、そのような主体であっても、翻訳者は常に「翻訳の過程で話し手と聞き手に対する人称関係から断続移層的に踏み出したりあるいはその関係に踏み込んだりする断続を絶えず繰り返さなければならぬ」¹¹⁾のだから、翻訳者の立場には必然的に言語的雑種性が内在せざるをえない¹²⁾。異言語が互いに接触する場というのは、本来はそのような言語的雑種性がより明確に露になる場であるはずである。こうした異言語の交わる場を伝達としての翻訳によって等価の意味で表象しきってしまうのではなく、二つの言語間の比較不可能な差異を示しうる言語への「翻訳」はあり得ないのだろうか。異種混淆とした言語の場を、伝達としての翻訳の言語で表象しきるのではなく、言語の重層性への想像を促す「テキスト」——そ

の語源の派生語である「織物」^{テクニカル}——の創造は不可能なのだろうか¹³⁾。崎山多美は、「翻訳」による「テキスト」的な言語を創造しようとする者の一人である。これ以降では、「テキスト」的な言語への彼女の挑戦を記述したい。

三 崎山多美における「小説のコトバ」

崎山多美の作品は、国民言語である「日本語」と「沖縄語」——彼女は後者を「沖縄コトバ」と呼び、さらに、それと計量不可能な差異を含意した言葉である「シマコトバ」とを区別する——の関係を問うことが主題となっている。しかし、崎山のプロジェクトは単純に国民言語の「日本語」に承認を求めない。イナーな言語としての「沖縄語」を提示することを目的にしている。「その島の方言、シマコトバで、日本語をかきまぜながら小説を書いてみたい」と語る崎山は、「日本語」と同等に認められる、あるいはそれに組み込まれる「沖縄語」の存在を主張するのではなく、むしろ「シマコトバ」と「日本語」の両方を使って「小説のコトバ」を新たに創造することを目指す¹⁴⁾。

標準的の日本語に寄りかかってあえて表現化される沖縄コトバの位置というのは、そっくり沖縄と日本の地政的力関係を

自ら肯定的に露呈したものの、別の言い方すると保守的日本語の補完装置、として解釈されてしまっても、しかたのないことであるし。

私が小説を書くための「私」のコトバ探しをしていたとき、どうしても抵抗してみたかったのはじつはそのところであった。標準的日本語に回収されてしまわざるをえない沖縄コトバの位置、というものを崩す方法を考えることから小説を書いていきたい、とせつに願ったのだ。方言を尾ヒレのように日本語にくっ付けることでなんとなく地方のアイデンティティを主張してみせる、というのではなくて、異質なコトバとコトバの関係を異質なままに立ち上がらせ、「私」なり的小説のコトバとしてどうか想像（創造）できぬものかと。ムボウを承知で¹⁵。

差異を同一尺度に置く「日本語」によって生じた「沖縄語」をそのまま記述するのではなく、「異質なコトバとコトバの関係を異質なままに立ち上がらせ、『私』なりの小説のコトバ」を創造しようと目論む崎山は、具体的にはどのようにして「日本語」と「シマコトバ」をかきまぜるのであるか。また、その試みによって生まれる彼女の「小説のコトバ」とはどのようなものだろうか。彼女が創造しようとする「小説のコトバ」が、

「日本語」と「シマコトバ」とのどのような関係の中で生成するのかを考察したい。

先の引用が示唆するように、崎山が小説執筆行為で希求する言葉は、「日本語」でも「沖縄語」でもなく、彼女はその行為の過程で、そのつど新たな言語を創造するという試み続ける。したがって、崎山の小説を読解する際には、物語の内容だけではなく、彼女の記述する言葉そのものにも注視することでより豊かな解釈が引き出されるように思われる。議論を少し先取りすれば、彼女は「日本語」では判読不可能な音の痕跡を、一見「日本語」で書かれているようにみえる小説の中に書き込む。

こうして、彼女の小説の中では「日本語」とそのような音の両方が出会い直され、互いが互いに益をもたらし合い、双方が変容していくという互恵的關係がみられる。彼女はこうした言語的実験を試みることで、「日本語」とは別の言語の創造を目指しているのである。

この試みは決して言語に閉ざされた概念的な戯れではない。ここで問題とされる「日本語」と「沖縄語」の關係は、換喩的に「日本史」とそれによって隠蔽され、修正される他者の歴史の問題を暗示する。崎山は、「同一」共同体である「日本」の「日本史」の一部に沖縄で起きた様々な記憶が「日本語」によって回収されることを懸念し——この行為もまた記憶を翻訳す

るということになるのだが——、均質的な「日本語」では表象することのできないそれらの記憶を音として比喩化するのである。だが、ここで急いでつけ加えなければならないのは、「日本語」では同定することのできないそのような計量不可能な差異を、その言語では判読不可能な音として出現させることは、決してそれが表象不可能であるということの意味するわけではない。彼女が創造しようとする言語は、そのような音が含意する記憶を表象不可能なものとして遠ざけるのではなく、むしろそれらを「日本語」のうちで示そうとする。

ガヤトリ・C・スピヴァクは『サバルタンは語ることができるか』において、マルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』において区別されるrepresentの二つの用法——「政治において用いられるような「代弁／代表」という意味でのrepresentationと、芸術や哲学において用いられるような「再現／表象」という意味でのrepresentation」¹⁶——の相補的關係を整理し、マルクスのvertreten（「代弁／代表」）的な記述は、代弁することの暴力性を遵守しているようにみえながらも、その内部において、それを否定するdarstellen（「再現／表象」）を再現させていたと論じた。スピヴァクはさらに、このマルクスの実践をジャック・デリダの「まったきの他者」の概念に繋げるのだが、それもまた、代弁する暴力的言語の内部

において現われると言うのである。ジャック・デリダは『たった一つの、私のものではない言葉——他者の単一言語使用』において、彼にとつてたった一つの、植民地主義的状况に産み落とされた他者の言語であるフランス語を使用する中で、「他者」の到来のよびかけを行う。デリダはその著書において、「同一」の言語を使うことが「他者」を禁止的に排除することに見加担しながらも、その行為の過程で、禁止されている「他者」の到来を可能にさせるという、二律背反を証明する。さらに彼は、そのように単一言語の中に同時に「他者」を住まわせることで、「そこにおいてさらにもう一つの言語を、押し出し、芽生えさせ、構築」することを意図する¹⁷。

「エクリチュール」、そう、そのようにして人は、なかなか指し示しているだろう——言語の、そしてその言語を通して、禁止するものであると同時に禁止された一つの言葉（フランス語の言葉は私にとってその両者だった）の、そしてその言葉を通して、あらゆる禁止された特有言語の、愛情深かつ絶望的な或る種の固有化の様態こそを。それはつまり、新たな調教を行う愛する嫉妬深い復讐なのであり、この復讐はと言えば、言語を復元しようとして試み、かつ言語を再び発明すると同時に、最終的に一つの形態を言語に（まず初めに言

語を変形し、改革し、変容させることで）与え得ると信じているのだ——そのようにして言語に禁止の犠牲を払わせることによって、あるいはおそらく同じことに帰着するが、言語に対して禁止の代価を支払うことによって。このことが、奇妙な儀式の数々に、秘密で打ち明けられない称場の数々に場を与えているのだ。したがって、クリプト化されたさまざまに操作に、すなわち万人の言語の中を循環している封印された幾分かの言葉に¹⁸⁾。

崎山が「日本語」で小説を記述する（せざるを得ない）以上、その「日本語」に関わる「日本史」的記憶を一定程度代弁することはまぬがれないであろうが、しかし、崎山はその代弁する行為のもとで、締め出されあるいは馴致された音を響かせようとする。「日本語」で沖繩の小説を書くという行為においてこそ、彼女は、「日本語」と音の交わりを促し、その言語の均質性の襲が聞かれる可能性を待ち望むのである。崎山の言葉を使えば、日本語を媒介しながら、そこで音の「コトバ」を伝えようとするのである。

私に残されるのは、耳を掠めて消えてしまった「音のコトバ」への思いをどう再生するか、という焦燥である。私の身

体に揺らぎとショックを与えたあの音をどう文字に載せるのか、私の紡いだコトバにふとでも触れてくれる者たちの耳に、どうやって「コトバの音」を伝えるのか¹⁹⁾。

「日本語」では意味は介せないが、耳元に響いてくる音をどう「翻訳」していくことができるのか——決してそれらの音を伝達としての翻訳へと回収しない形で。音が「日本語」に全く回収されることを回避して、どう音を伴った別の「コトバ」を創出することができるか、という課題意識がここでは示されているのである。彼女の言葉で言い換えれば、彼女の耳に一瞬掠めていく「音のコトバ」を聞き取り、それを「日本語」の中に記述すること。そして、「日本語」と交ざり合うことで現われる「コトバ」にのった音（「コトバの音」）を受容者に届けることを目的とする。ゆえに、崎山が述べる「コトバの音」は、もはや不可知の音を意味していかないだろう。むしろ、「日本語」には判読不可能な音をそこに響かせ、より豊かな「コトバ」の可能性を模索しているのである。

四 「ゆらていくゆりていく」⁽²⁰⁾

「ゆらていくゆりていく」(二〇〇三)は、崎山の小説の中で

も特にそのような音の記述が豊富な作品と言えるだろう。沖縄の言葉のイントネーションを伝えるルビの活用や、擬態語、擬音語、日本語的な語であっても敢えてカタカナで表記する等、様々な音にまつわる記述がなされる。

「ゆらていくゆりていく」の舞台は、保多良ジマという架空の島に置かれ、その住人はどれも八十歳を超える老人ばかりである。そこでは男女共に一つ屋根の下で生活することはあれども、子どもを作らないことを美德とする風潮があり、新しい生命の誕生はもう何十年もない。以前は、保多良ジマの存続を祈るため、「シマ建ての神、御主前加那志を祀るオンナたちだけの謎めいた祭」である「ヘホタラウブナカ」という祭りが行われていたのだが、それを司るべき女性達は、シマの養老院で寝たきりになってしまっているために、その祭りも途絶えて久しい。このように島自体もその住人もかつての活気を失い、保多良ジマが消滅へと向かっていることは、疑いようもない事実である。死者の「遺骸は焼いたり埋めたりせずに、イカダカズラを全身に巻きつけ陽の昇る寸前に海へ流し、やがてそれは海溝の底に沈んでしまうのだが、「重量の足りないオンナ子供老人など」は、保多良ジマの北海岸の潮の流れに巻き込まれ再びシマの砂浜に打ち上げられて風化する。お墓というものがないために、遺骸から遊離した魂は成仏せず、「ヒトダマとなっ

て永遠に水の中に漂う」。消滅へと向かうこの島で死ぬ者は、決して成仏することはなく、死を生き続けるというように、保多良ジマをこのようにディストピア的に表象することからこの小説は始まる。

この小説の物語はある時、その住人であるジラーが、海辺で、水中から水上に浮くように現れた水の泡を発見した話をもって開始される。その水泡は波の音を伴いながらリズムよくダンスを行い、それに魅了されるジラーもまた意識せざる間にそれを模倣し、両者は互いに近づきあう。その時に鳴り響く波の音は、風の音、三味線の音と変化しながら、ジラーの身体が潜在的にとどめているかつての懐かしい感覚を思い起こさせる。ジラーが水泡に近づくにつれ、それはヒトの形、しかも乳房を誇示したオンナとなり、匂いまでも漂わせながらジラーと結びつく官能的な話であった。

「ゆらていくゆりていく」全体で展開される物語は、一つの一貫性のあるストーリーというよりも、このジラーの奇妙な出来事の話に触発され、島の住人の別の話が想起されていくというように、話が話呼び重層的にそれらが語られるという構成になっている。ジラーが不思議な泡のオンナ（ウミチル）と交わり合った出来事の話は、ウミチルの両親の別の話と重なりをみせる。保多良ジマの北の岬には、「ナガリザキ」という集落

があり、「そこに住む者たちは、ナガリムン、つまり流れ者と
言われ、ムラ八分ならぬシマ八分的存在のヤカラであった」。

「ナガリザキ」のさらに海岸端に「プリムン宿と呼ばれる一軒
の乞食小屋」がある。「プリムンとは、阿呆、フラー^①、ボン
クラなどなどの類義語を持つ保多良語で、原義は気のふれた者
という意味の、ひいてはおつむの足りない者、氣の利かぬ者、
非常識者をも指すことになる差別語」で、つまり「保多良の常
識では理解の計りかねる、ヘンジン、ハグレ者」を意味する。

「プリムン」と呼ばれる者は、保多良ジマの内部出身者ではな
く、潮の流れに乗ってどこかよそから偶然島に辿り着き、人目
を忍んでこっそり住みついた者である。ある時、島の北の外れ
の浜辺に「大男^{オオオトコ}」が流れ着き、「ナガリザキ」の「プリムン
宿」に住みついた。島のあるオンナ（チルー）が島の人々の反
対を押し切り、その「プリムン」との間に子をもうけたのだが、
その子があのジラーと交わり合った不思議なオンナ、ウミチル
である。

保多良ジマのよそからやってきた「プリムン」の大男は、
「古代ギリシャの奴隷を思わせる」程、黒々とした肌をしてい
るということになってはいるのだが、しかし本来よりその色であ
るといってはなく、目撃された当初から徐々に肌の色を変え
ていき、「もともとは何色系の人種だかは傍目には分からない」

と記述されている。エティエンヌ・バリバールは、「レイシズ
ムの構築」において、近年のレイシズム研究は、かつての反ユ
ダヤ主義や肌の色に基づくアパルトヘイト制度のような人種差
別を生んだ生物学的人種カテゴリーが本質的に存在することの
いかがわしさを指摘し、むしろ社会やイデオロギーによって、
「カテゴリーそのものの練り上げ」が促されているという「人
種なきレイシズム」あるいは「文化的レイシズム」という観点
の考察へとシフトしているとまとめる^②。大男の「プリムン」
の肌の色が変化することは、彼が島の人々と生物学的な人種の
差異によって本質的に異なるゆえに交じり合うことができない
というのではなく、よそからやってきた「ナガリムン」である
ためだけに、島の住人から人種化され、「プリムン」として島
の除外の対象とされていることを示唆する。ウミチルは、その
大男の子として生まれたために、彼女もまた一般的な人間とは
異なる動物的な姿として、ある人種化された眼差しのもとに
描写されるのである^③。保多良ジマの住人であるジラーとチル
ーの物語はどちらも、島の内部の人々から人種化され、あるいは
「異質」化された者との接触の話だったのである。

ウミチルとジラー、「プリムン」の大男とチルーのこの二つ
の交わりの話は、保多良社会の禁制を二重の意味で破る出来事
であったと言えるだろう。一つには、島から除外されるべき

「プリムン」およびその子との接触。もう一つは、子をもうけること（男女の間における性交渉）である。しかし、このような行為が禁止されるのにも関わらず、二つの話の中における性的接触の場面は、保多良社会が消滅へと向かい活気を失った雰囲気漂わせているのと好対照をなし、波や泡の音を始まりとして風や三味線などの別の音へとそれが派生的に広がっていき様子をみせ、さらにそのような複合的な音に伴ったイメージや色、匂いまでをも想像させることで、身体の内感を鋭敏に導くような潤い豊かなものとして描かれるのである。こうした二つの話が保多良ジマの禁制を破る出来事として記述される時、それは見せしめ的に禁止の意を増強するのではなく、むしろ保多良社会が美德とするその風潮が、それ自体の消滅へと導いていることを暗示するのである。つまり、保多良社会の純粋性を保とうとするために、「異質」であるものを、その社会の論理によって異質的に表象し（人種化の眼差しを投げ）、さらにその論理を補強あるいは自然化するという語り（禁止令）自体が、その消滅の原因であることと示唆するのである。

「プリムン」の大男とチルーが性交渉をおこなうのは、こうした均質性を志向する島の内部とその外を隔てると同時に、両者が交わるという両義性を象徴する海辺であることには注目する必要があるだろう。「プリムン」の大男がチルーのもとに近づ

く際に発する大声は、「遙かな沖合から浜辺へ押し寄せる大波のためたい」と形容され、さらに、「るろ、るろろっ、というようにしか聴こえぬ音声」、「何やらを囁きかけてるようだが、見知らぬ異人のコトバ」、「いつまで聴いても音程の捉えられぬウタのような」、島の言語では解することのできないよそからやってくる音として、チルーの耳朶へと流れこむ。チルーは、そのような音に浸され、その意味を解釈する時間もたないまま、二人は身体を交えるのである。「プリムン」の大男の存在は、保多良ジマから排除の対象になっているのだが、その大男と島の内部のチルーが身体を交えるのは、彼を異質で表象不可能なものとして遠ざけるのではなく、分け隔てる人種化の眼差しを越え、島の内と外との出会い直しを示していると言えるだろう。

こうして「プリムン」大男とチルーとの間に生まれたウミチルは、チルーの母親（ウミチルの祖母）によって名付けられた名前前で、正確には「思千瑠ツギチル」と言う。「ウム」とは、沖縄で使われる言葉で「思う」という意味であることから、「ウミ」には「思」の字があてられる。したがって、ウミチルの名前に込められているのは、無数（千）の宝（七宝の一つである瑠璃）を思うということだろう。ウミチルという名前を「日本語」的に考えると、チルーの名前を受け継いだ海（ウミ）の子という

意味に捉えられ得るため、禁制の境界線である海において、あの「プリムン」の大男とチルルの性交渉によってできた子という差別的な意味に回収されかねない。しかし、ウミチルという音に「思千瑠」という漢字があてられる時——「思千瑠」にルビがふられるのではなく、ルビに漢字があてられてできた名前という論理の逆転に注意すべきであろう——、その名前もはや「日本語」のようでも、「沖縄の言葉」のようでもない²⁰。沖縄の音が「日本語の補完装置」として働くのではなく、むしろそれが「日本語」に含まれる差別的意味の変革を促し、その両者の相互作用が新しい「コトバ」を生んでいる例であると言えよう。

したがって、「プリムン」大男と島のチルルの交わりを示唆するように音を表示するルビと「日本語」の漢字が合わさることと生まれた名前が意味するのは、人種化の眼差しを温存した「日本語」が他者を回収したということではなく、両者の交わりが別の価値を想像／創造したということである。

そのようなウミチルと身体を交えるのがジラーである。ウミチルは海から水泡として音を奏でながらジラーのもとへやって来る。その音がジラーの忘れかけていた懐かしい身体感覚を思い起こしながら、両者は海辺で交歓する。ジラーの連れ合いであるナビィは、「保多良ジマの古い格式を守る根元（こゝろもと）と言われ

る家の後継ぎ娘」で、「ニームトウの血を受け継ぐ最後で最後のイナグ（女）」である。「シマの発祥からその根の祭りを司り永遠のシマの存続と平穏を願うべくへホタラウブナカ」を守り通してきたニームトウのイナグ」であるのだが、彼女とジラーとの間には子どもは出来ず、「シマの守護神、保多良御主前（ウシキミノミナト）加那志（カナシ）と通じ合う者がこの保多良から喪われ、シマが減じることは彼女の目にも、誰の目にも明らかであった。死期が近づいたナビィは、「へホタラウブナカ」を行うための最後のお籠もり後、体力を激しく消耗し、やがてジラーの腕の中で息を引き取る。その直前に彼女が残した言葉は、「保多良特有の韻律に乗せた短詩型歌謡」で、「保多良御主前（ウシキミノミナト）加那志（カナシ）の来迎を誇らかに寿いだ内容」であった。つまり、ジラーに託されたナビィの想いは、純粹性を求めるあまりに消滅へと向かっている保多良ジマの再興なのである。そのようなジラーと「思千瑠」の身体（ウシキミ）の交渉は、先のチルルと「プリムン」大男の話のように、他を排斥し自らの内へ内へともる傾向のあるシマの習わしに変化を与える契機なのであった。言い換えれば、「思千瑠」は純粹性への過剰な執着ゆえに形骸化し廃れた保多良社会の風習の変容のモメントをもたらす。その意味で、「思千瑠」は保多良社会にとって無数の宝となる可能性を宿しているのである。

しかし、ジラーもまたしばらく後に死に至り、そのことによ

って、保多良ジマの消滅が決定づけられているように感じられる。だが、ジラーと「思干瑠」の身体的交流から始まるこの物語は、ジラーの語りを聞いたタラーとサンラーの不思議な話へと移ってゆく。彼らはジラーの話に触発され、それぞれが別の体験を呼び起こす。別の人の別の出来事の中で様々な音は様々な「翻訳」されながら、保多良社会の無数の在り方を人々に想像／創造させてゆくのである⁵⁵。

五 「ホタラ」と「保多良」——ディストピアから ユートピアへの想像／創造へ

「ゆらていく ゆりていく」の舞台である保多良ジマは架空の島であった。良いことを多く保つ島を含蓄するようにみえるその島の名前は、もとは「ホッターカされたシマ」という意味であることが、物語の終焉で告げられる。本論文においては、その島を「日本語」や「単一民族日本」の風刺として解釈し記述したのだが、それは同時に「沖繩語」や「沖繩」でもあることは述べておきたい。なぜなら、保多良ジマの均質的空間は、「日本」から切り捨てられる沖繩が、それに承認を求めるあまりに、与えられる「沖繩」を内面化することで、自ら再生産する「沖繩」でもあるはずだから。

しかし、保多良ジマを「日本」や「沖繩」と確定することもまた違うと言わなければならない。崎山が沖繩に実在する島の名前を使わず、架空の島である保多良ジマを舞台に設定した点は重要である。彼女は保多良ジマを単に批判されるべき対象として描くのではなく、それが別の形態へ変容する可能性を宿した場であることを意図しているのである。それはちょうど、チルーと「プリムン」大男が身体を交えた海が、禁制の境界線としてのみ機能するのではなく、内と外の隔たりを溶く場へと変容する可能性を宿しているように。つまり、その島がフィクションとして設定されているのには、「ホッターカされた」島でありながら「保多良」でもあるというような両義性が同時にあり得ることが意図されている。言い換えれば、ディストピア的空間をそのまま固定化せず、それをユートピア空間へと移行させる想像力を掻き立てることが崎山に意図されているために、彼女は現実空間を決定づけるような表象を避けるのである。こうして「ホタラ」に「保多良」という字をあて、物語の終始、消滅に向かう島においてそのよそからやってくる「プリムン」の身体との交わりを題材にした「ゆらていく ゆりていく」は、「ホタラ」を「保多良」へと変容させる彼女の夢の記述と言えるのである（その、ホッターカされたシマ、ホタラに、保多良、と選びに選んでめでたき文字を当てているのは、シマピト

らの、我シタシマにたいする並々なぬ熱く深い希いがこめられていたゆえではあろう)。

沖繩を志向するというのは、「日本」と「沖繩」といった均質的空間への抗争が要請される場にながら、同時にそれとは異なった場を夢想することである。その場を夢想するには、均質的空間と位相の違う場にある「他者」を聞き取るという絶え

ざる丹念な試みが求められる。チルーと「プリムン」大男の間
にできた「思千瑠ウミチル」と交わるジラーの話が、サンラーやタラー
の「他者」との出会いを触発するように、沖繩という言葉は、
すでに、それを耳にする誰しにも「他者」との出会いを促して
いる。無数の「他者」を聞き取る営みは、これからも、個々人
それぞれがそれぞれの場の中で追求しなければならぬ²⁶⁾。

註

- (1) 新城郁夫『沖繩を聞く』みすず書房、二〇一〇年、二三五頁。
- (2) 屋嘉比収『沖繩戦、米軍占領史を学びなおす——記憶をいかに継承するか』世織書房、二〇〇九年、一一一頁。
- (3) 同書、一一〇頁。
- (4) 新城が、屋嘉比の「聴く」実践を批判的に継承する形で、「聞く」という文字を採用しただろうというアイディアはもとと戸邊秀明氏のものである。
- (5) 『漢字源 (1-15 第1〜第4水準版)』学研。
- (6) 鶴飼哲『主権のかなたで』岩波書店、二〇〇八年、七頁。
- (7) 崎山多美『ロトバの生まれる場所』砂子屋書房、二〇〇四年、一一五頁。
- (8) 酒井直樹「日本思想という問題」『日本思想という問題——翻訳と主体』岩波書店、二〇〇七年、四頁。
- (9) 新城郁夫『沖繩文学という企て』葛藤する言語・身体・記憶』インパクト出版会、二〇〇三年、八九頁。
- (10) 同書、九二頁。
- (11) 同書、九五頁。
- (12) 酒井、前掲書、七一頁。
- (13) 「テキスト」と「織物」の関係については、酒井の別の著書『過去の声』から着想を得た(酒井直樹『過去の声——18世紀日本の言説における言語の地位』川田潤、斉藤一、末廣幹、野口良平、浜邦彦訳、以文社、二〇〇二年、八頁)。
- (14) 崎山多美「シマロトバ」でカチャーシー『「私」の探求・21世紀文学の想像2』今福龍太編、岩波書店、二〇〇二年、一五九頁。
- (15) 同書、一六九頁。
- (16) ガヤトリ・C・スピヴァク『サブアルタンは語ることができるか』上村忠男訳、みすず書房、一九九八年、十四頁。さらにそれらの定義は別のところで以下のように記述される「ver-heiten (第一の意味において) の represent (代弁／代表すること) と darstellen (第二の意味において) の re-present (再現／表象する) とのあいだで展開されているプレイ」

(15頁)。

(17) ジャック・デリダ『たった一つの、私のものではない言葉——他者の単一言語使用』守中高明訳、岩波書店、二〇〇二年、一〇九頁。

(18) 同書、六二—六三頁。

(19) 崎山多美『コトバの生まれる場所』、一四—一五頁。

(20) 崎山多美『ゆらていくゆらていく』『ゆらていくゆらていく』講談社、二〇〇三年。

(21) 沖繩で使われる言葉で、阿呆という意味。エティエンヌ・バリバル『レイシズムの構築』佐藤嘉幸訳、『レイシズム・スタディーズ序説』鶴飼哲、酒井直樹、テッサ・モリー

ス・スズキ、李孝徳、以文社、二〇一二年。

(23) 「満潮の勢いに押し出され、そこだけ異様に突き出て膨れあがったチルリーの腹から、難産く、んざんの末、未熟児のぎりぎりの犬っ子のような赤子が生まれた。皺くちャの小顔に尖った鼻の座る泣き声ばかりがいやにけたたましい、浅黒い肌に青い目のすわった、何人とも知れぬちぐはぐな面影をもつイナグン子、だった。」(『ゆらていくゆらていく』五二頁)。

(24) 「日本語」の会話文にルビをふるることによっ

て、「沖繩の言葉」の音で、その文を理解させようとする手法は崎山に限らず他の沖繩小説に時たまみられる。しかし、崎山のルビのふり方は、単に「日本語」の文を「沖繩の言葉」の音の響きで表現するというように、措定される両者の言語を無批判に記述するのではなく、非限定的な差異を含んだ沖繩で使われる言葉に、「日本語」の漢字をあてていうような、力点の逆転がおきているのである。最終的に「日本語」の漢字をあてるといことが、安易にその言葉へ回収するわけではなく、「日本語」と沖繩で使われる言葉が並置された複合性を持った言葉は、「日本語」とは異なる意味を創造している点に注目すべきであろう。

(25) 新城郁夫もその点について言及している。「事実、さきの『ジラー』の話聞いていた『サンラー』というまだ『八十』になったばかりの『生まれだての老人』は、『ジラー』の話の中に、自らの過去の体験を重ねて別の物語を提示していくのだし、そこではさらに、時空間を越えた幾多の人々の重層的な物語が関わってきて物語は複数化されていくのだ。つまり、物語が提示されるや、その物語

を別の物語が侵食し変形し始めるわけであり、この小説においては、その派生的な力学の中で、物語は語られると同時にその正統性を掻き消していくといった具合なのである。」(新城郁夫『崎山多美』『ゆらていくゆらていく』のために『沖繩文学』という企て・葛藤する言語・身体・記憶、一〇五—一〇六頁)。

(26) 本論文をある程度まとめたあたりで、前半の翻訳についての理論的考察をさらに深める必要があると感じた。というのは、崎山多美の小説の読解で重要なのは、前半で記述した「言語の重層性」を提示することよりも、異言語の相互作用が別の言語を創造することであるということに気付いたからである。今後は、「名なきものを名へと翻訳する」(ベンヤミン)のような言語の再創造という観点から翻訳の概念の理論的考察を課題としたい。(ヴォルター・ベンヤミン「言語一般および人間の言語について」『ベンヤミン・コレクション』I・近代の意味』浅井健二郎編訳、久保哲司訳、筑摩書房、一九九五年、二六—二七頁)。